

# 清 月

9月中の出句 19名 延べ501句



第158号 平成25年 9月

## 推敲について

俳句は、事象を頭の中で練りあげながら詠むことから、自我が誇張され・思い込みの激しい状態の句に仕上がるが多々あります。

俳句は、作者と読者という関係で成り立つ文芸です。読者に作者の我を押しつける句・作者にしか分からない思い込みの句・嫌悪の情や苦痛の情をもよおす句は、読者に敬遠されますので俳句として不成立ということになります。

俳句は、読者への贈り物です。作句上の約束事を作品にあてはめ、努めて読者の立場で推敲して読者に受け入れられるように纏めなければなりません。

贈り物である俳句は、疵や汚れを取り除き、美しい言葉(詩の言葉)で綺麗に包装して送り出したいものです。

俳句は、出来上がった時点では、瑕疵や自我の強い主観的な句であると気付かないことが多く、推敲しにくいものです。

自我や思い込みは、日時経過によって薄れてゆきます。作句を一晚おくことによって、何とも嫌みな気障な主観的な句であることに気付き、客観的な句になるように推敲することがあります。この様な観点で、出句函に出した句を時には見直し、再推敲していただき句の質を高めていただきたいものです。

また再推敲ができました句は、新たな句として出句函で発表いたたきたいものです。

ゆたか

放生会

野田ゆたか

暮れてより虫の浄土となる庵  
蓑虫にありし好みの糸の丈  
問診に主治医の敬語露けしや  
推敲の虚をはぐらかし秋扇  
鳥舞のまことしやかに放生会

雑詠

ゆたか選

(ゴシックは秀句)

近江路や湖までつづく豊の秋 吹田 池下よし子  
花芙蓉あれやこれやと一と日暮れ 同  
白鷺の思惟のポーズや水の秋 同  
本殿の御霊小暗し萩の風 同  
五の段を諳んじおれば赤とんぼ 同  
旅支度済ませて安堵小望月 岡山 橋本幹夫  
おとがひに髭剃り残し敬老会 同  
洋上に秋分の日の旭日旗 同  
十六夜や奇跡の一本松は立つ 同  
荒波に小舟突刺す二日月 同

立待や黄色き月が梢から 千葉清水恵山

三日月の千切れるやうに雲に消ゆ 同

八朔の屋台囃子に浮かれけり 同

阿寒富士毬藻の湖の秋深し 同

栗餅のふわり黄色く搗きあがる 同

法師蟬けふの命を全うす 三重山口美琴

雨去りて演奏再開秋の虫 同

二日月無いものねだる幼かな 同

園児らの祖父母の若き敬老の日 同

栗茹でてナイフとスプーン添へて置く 同

きはやかに落暉に映ゆる七竈 愛知足立山溪

雄叫びて赤白帽の運動会 同

分校の松茸飯や父母の会 愛知足立山溪

秋彼岸兵士の墓に供花ゆれて 同

腰曲げて拾ふ背中にまた木の実 同

早鞆の連れ潮を待つ良夜かな 千葉田村公平

天の川この世に似たる星いくつ 同

寄り添ふてやがて別れし秋の蝶 同

檣灯の滲む雨月や壇ノ浦 同

廃校に声振り絞る草雲雀 同

台秤昔も今も桃を売る 静岡渡邊春生

電車バス乗り継ぎ来たり赤のまま 同

翳雲話弾んで来たりけり 同

鬼の子や行きも帰りも道暗き 静岡 渡邊春生

ひと言がふた言になる夜長かな 同

**アルプホルン響く高原秋の色** 大阪 木村宏一

虚しさに泥靴蹴上げ草の露 同

鉢植ゑの竜胆届く文添へて 同

巡り来る月日のありて彼岸花 同

手づくりの味噌の匂ひの蔵の秋 山梨 湯沢正枝

枝豆の香りは郷の香りかな 同

疲れたる色を隠して秋日傘 同

早稲を刈る兵士の墓を上に見て 同

露草を泪の色と思ひけり 岐阜 石崎そうびん

覗き込む顔映りけり秋の水 同

捨て置きの大八車昼の虫 岐阜 石崎そうびん

よじ登る馬の背道や葛嵐 同

鬱蒼と藪騒がしき竹の春 三重 後藤允孝

草の花生けて一輪無人駅 同

道道に気儘に伸びて猫じやらし 同

御遷宮控へし街や晴れわたる 同

曼珠沙華棚田を仕切る色として 大阪 山縣伸義

葛咲くや明日香へ通ず峠道 同

また一つ街の灯消えて寝待月 同

活花の主演を支へ吾亦紅 同

かき分けて風通りけり稲の丈 大阪 森戸しゆじ

颱風の過ぎし小池の亀の息 同

軒下に出番待ちたる秋の風 大阪 森戸しゅじ  
 朝霧の消え入る前に決断す 山梨 志村万香  
 曼珠沙華襟足上げて髪を結ひ 同  
 タベには姿小粋な乱れ萩 同  
 孫からの絵手紙届く敬老日 千葉 筒井省司  
 秋雲の流れる先を眼で追いぬ 同  
 一斉に雀飛び立つ稲田かな 同  
 蔓草を微かに揺らす秋の風 愛知 駒田暉風  
 漢方の力を借りて九月かな 同  
 林檎食べ独り仮眠につきにけり 愛媛 石川順一  
 笠着けど深き眼差し風の盆 兵庫 堤 千鶴子

宏一さん撮影／アルプホルン



寸感

ゆたか

近江路や湖までつづく豊の秋 池下よし子  
近江路は、中山道の近江路と高島を経由する越前に通ずる近江路がある。

湖までつづくいえば湖東の田園の景であるう。「湖までつづく」が言い得て妙。

瑞穂の国の美しい景が目に浮かびます。

旅支度済ませて安堵小望月 橋本幹夫

旅荷や着衣などは、当日の天候を予測して準備します。

準備を済ませ夜空を仰いだら小望月が煌々と照っていたという作者。

明日の晴天を約束する小望月がよく利いた佳句。

立待や黄色き月が梢から 清水恵山

月の出が、着座して待つ前々日の名月より一時間あまり遅れるので外に出て待つ月。

やっと出た月は名月と同じ澄んだ色(黄色)をしているという。

これからの欠けゆくばかりの月を惜しむ気

持ちと一抹の淋しさが伝わってくる。

法師蟬けふの命を全うす 山口美琴

精一杯生きて短い命を鳴き尽くす法師蟬。

時雨状態で鳴く夏の蟬に比べて秋風ともに鳴き始める法師蟬には、鳴き声そのものに秋の哀れさを感じさせられる。

「全うす」と捉えたのは優れた作句力。

アルプホルン響く高原秋の色 木村宏一

アルプホルンは、スイスの羊飼いが合図に使用していたものです。

我が国では楽器として扱われ、観光客に演奏されたりしています。

「秋の色」から秋の光(日差し)や草木の錦(紅葉)など大きな景色が目に浮かびました。

朝霧の消え入る前に決断す 志村万香

霧は間もなく晴れるであろうが、所用についてどうにしようかと迷っている作者。

「決断す」が前向きな言葉で心地よい。

読者が行間の決断した事柄に思いを馳せるなど句を楽しめる。省略の利いた佳句。

添削

ゆたか

原句 間引き菜の茎折れやすき秋の水

「間引き菜」と「秋の水」は、共に定着した季題です。

二つの季題の使用に主従がなくどちらを詠んだのが分からないので俳句として成立しません。

「秋の水」を削ります。

添削 間引き菜の茎折れやすき水洗ひ

原句 稲光洗ひカレーの汚れなり

俳句は読者に贈る文芸です。読者に嫌悪感を持たれないようにしましょう。

句材に美しい面と汚い面があるときは、美しい面を読者に贈りましょう。

洗い始めは、汚れていたものも終われば美しいものになっています。

添削 稲妻や洗ひあげたるカレー皿

原句 台風の来る予想してカレー鍋

「来る予想して」が説明文になっています。台風が来るとなると、食材のほか屋外のも

の避難・戸締まりなど色々なことをしなければなりません。

中七を他の台風準備の大変さを想わせる言葉に置き換えて説明的な要素を削ります。

添削 台風の準備の二つカレー鍋

原句 すやすやと眠る子猫や小望月

猫は、年中孕みますが、俳句では、猫の恋・親猫・子猫などは春の季題として定着しています。

子猫の「子」を削ります。

添削 すやすやと眠る飼猫小望月

原句 草茂る路傍に赤き曼珠沙華

「草茂る」は、夏の季題として定着しています。

名も分からない雑草を表す言葉として、辞書にはありませんが、詩の言葉として「醜草(しこぐさ)」があります。

「草茂る」を削ります。

添削 醜草の路傍に咲きて曼珠沙華

インターネット名月句会開催結果

○ 開催日 九月十九日

○ 参加者 十二人

池下よし子 山縣伸義  
橋本幹夫 清水恵山  
木村宏一 森戸しゅじ  
渡邊春生 後藤允孝  
山口美琴 筒井省司  
湯沢正枝 野田ゆたか

○ 出句三句 互選五句

○ 互選結果  
五点

満月の湖渡りゆく旅寝かな よし子

四点

二上の峰はるかなる月の道 伸義  
わが影と連立ち帰る月の道 恵山  
クレーター見えて望郷望の月 幹夫  
香煙のただよふ仏間良夜かな よし子  
城跡はいつもの姿良夜かな 正枝

三点

満月に心の闇を見透かされ 允孝  
少しとは注げといふこと月見酒 ゆたか  
沙汰無きの妹も仰ぐか十五夜を 美琴  
満月の光を浴びよ癒えよ 春生

二点

名月や団子作りし母偲ぶ 省司  
名月や焼酎足して独り言 省司  
満月や村に戦死者名鑑碑 春生  
満月や雲ことごとく砕け散る 伸義  
リニア駅決まりふる里月見酒 正枝

○ 選者選

一席

ゆたか

寝静まる町を夜すがら月包む 恵山  
辛うじて為残しもなし月の宴 しゅじ  
老いの眼に二重に三重に望の月 伸義

辛うじて為残しもなし月の宴 しゅじ

一点

二席

名月や年輪重ね古希祝ふ 允孝  
観月の宴の土産両の手に 允孝  
石蛙影持つ望の月明り ゆたか  
名月を生みて黒々郷土富士 ゆたか  
端座して消えゆく軒の月今宵 しゅじ  
名月や正座はできぬ立見席 美琴  
小鬼棲む心洗はむ月今宵 恵山

クレーター見えて望郷望の月 幹夫  
三席  
満月の湖渡りゆく旅寝かな よし子

佳作

わが影と連立ち帰る月の道 恵山  
観月の宴の土産両の手に 允孝  
俳誌綴づ又新たなり月今宵 宏一  
二上の峰はるかなる月の道 伸義  
名月を遮る雲のなかりけり 春生  
名月や焼酎足して独り言 省司  
五十余年暮らししこの地月今宵 正枝  
沙汰の無き妹も仰ぐか十五夜を 美琴

○ 高点者

九点 よし子  
八点 伸義  
七点 恵山

○ 選者詠

ゆたか

少しとは注げといふこと月見酒  
名月を生みて黒々郷土富士  
石蛙影持つ望の月明り

インターネット俳句 清月  
第158号  
平成25年9月中の出句から

発行  
平成25年10月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
[https://haiku575.info/seigetukai/  
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)

